

実習体験の分析（４）

肯定的体験と否定的体験（保育所実習と幼稚園実習の比較—その二）

青 木 里喜子 森 安 万亀子[※] 北 川 歳 昭
Rikiko Aoki Makiko Moriyasu Toshiaki Kitagawa

I 目 的

保母養成においては、学外実習こそ重要であるといわれる。しかし、「実習」は一体どうであるべきか、という本質論は議論されないまま、事務処理に追われているのが現状ではないだろうか。

流動する社会を背景に保育事情は変質しているかに見える。そのような社会情勢とともに養成校の実習の姿も揺れ動き多様化し、ともするとその本質からかけ離れたものになっていくのではないかと不安に駆られる。

養成校では、実習受入れへの依頼や、配当への配慮など事務の繁雑に終始し、学生は、安易に単位や資格（免許）の取得のためにと、取り組もうとする。また保育現場も、学歴社会に追従するかの如く早期教育や特殊技能教育の流行、または幼児減少に伴う経営の不安や保育内容の見なおしなど、これまた揺れ動き、実習生の受け入れは困難・迷惑の他なにものでもない。まして、受け入れ準備など望むのが無理というものであろう。

しかし、世情は如何に変わろうとも、「実習」には不変のもの、変ってはならないものがある筈である。それは「よい保育者養成」を軸にした、学生・養成校・保育現場を繋ぐ「実習」の正しい位置づけである。それが「実習」の本質論であらう。

学生は「よい保育者になりたい」・養成校は「よい保育者を養成したい」・保育現場は「後継者としてよい保育者が欲しい」と、三者が共に「よい保育者」をめざしていおり、その望みは「実習」によって叶えられるのである。もし実習がなければ、この三者の繋がりが得られないばかりでなく、「よい保育者」を得ることも不可能と言っても過言ではない。

また、「よい保育者」を得るためには、三者三様の立場と本質を十分弁えてその機能を発揮し「実習」を成功させなければならない。「実習」が成功したというのは、学生がよい実習体験をしたということである。すなわち、よい実習体験は、「よい保育者に」続くのである。われわれが、学生の肯定的体験と否定的体験に注目した理由はここにあるのである。

学生に「よい実習体験をして欲しい」と願わない教師はいない。しかし学生は未熟のまま実習に出る。未熟さ故にその実習体験も未熟で、卒直に真情（本音）を吐露する。学生の否定的体験は、その原因が自分自身にあることも考慮できないでいることもあろう。しかしその真情（肯定・否定）を受けとめることによって、「実習」の問題を把握できるのではないだろうか。

学生の実習体験をより意欲的にするもの、または意欲を阻害するものなどを把握することにより、「実習」を成功させる正しい方向を見出すことができるのではないだろうかと考えたのである。

さきにわれわれは、（森安ら1983、青木ら1984）保育実習終了後、学生の実習体験を、「肯定的体験」と「否定的体験」とに分けて分析した。

（「肯定的体験」とは、学生の実習体験の中で、保育者志望を高められると思われるような、「うれしかった・楽しかった・よい印象が残った・やる気が強くなった」などの感動体験をいい、「否定的体験」とは、「つらかった・悔しかった・悪い印象が残った・やる気をなくした」など、ショック的な体験で保育者志望を弱める体験を指す。）

この調査により、保育所実習においては、大部分の学生が多くの肯定的体験をしていることが判明した。しかし僅かではあるが、否定的体験もみられた。

「実習」での否定的体験は好ましくない。なぜならば、学生の実習意欲を減退させるのみでなく、保育界に対する不信や、志望の挫折にも結びつきかねないからである。

否定的体験が派生する要因として、養成校の教授内容の工夫、学生の個人的資質や志望意欲・保育観や、また保育現場の指導のあり方の工夫などに不足分があることが十分考えられる。特に人間関係の良し悪しは、ひとり保育現場の保育者集団のみでなく、実習生同志、実習生と保育者（担任）との人間関係のあり方が、実習体験の良し悪しに深くかかわっていることも分った。

われわれは、保育所実習体験の分析（森安ら、1983、青木ら、1984）に引き続き、幼稚園実習中の体験を調査分析した（森安ら、1985）。

本論文では、幼稚園実習調査の結果を分析するとともに、保育所、幼稚園両実習の体験を比較し、両実習の類似点と相違点をさぐることによって、学生・養成校・保育現場の三者が「実習」の本質論へ、立ち返るための資料としたい。

Ⅱ 方 法

- 1 対象、岡山県下短期大学幼児教育科（保育科）保育所実習 3 短大370名、幼稚園実習 2 短大303名 計 673名
- 2 調査期間 保育所実習：1983年 9 月～10月、幼稚園実習：1984年11月～12月
- 3 調査内容 詳しい設問内容については、森安ら（1983）を参照のこと。

本稿では、肯定的体験項目群および否定的体験項目群（表1）について、下記の項目とクロス集計した。

質問項目とは、①教職員数 ②児童数 ③園長先生の性別 ④園長先生の勤務形態 ⑤園長先生の年齢 ⑥配当方法 ⑦通勤方法 ⑧通勤時間 ⑨担当したクラスの数 ⑩担当したクラスの年齢 ⑪主として担当したクラスの担任の先生の数 ⑫担任の先生の年齢 ⑬実習の期間 ⑭志望の変化 ⑮志望の強さ ⑯就職の希望、などである。

表1 肯定的体験項目群および否定的体験項目群

1 肯定的体験項目	
A群	子どものようすを見て感動した。（9項目）
B群	指導実習での子どもとのかかわりの中で感動した。（12項目）
C群	指導実習で先生とのかかわりの中で感動した。（10項目）
D群	担任の先生の姿をみて感動した。（7項目）
E群	実習生活全般の中で感動した。（5項目）
2 否定的体験項目	
A群	園長先生や、担任の先生との全般的なかかわりの中でショックを受けた。（14項目）
B群	職員の人間関係についてショックを受けた。（4項目）
C ₁ 群	担任の先生のようにすを見てショックを受けた。（9項目）
C ₂ 群	担任の先生とのかかわりの中でショックを受けた。（6項目）
C ₃ 群	指導実習（部分・全日）において、担任の先生とのかかわりの中でショックを受けた。（15項目）
D'	子どもとのかかわりの中でショックを受けた。（7項目）

Ⅲ 結果と考察

〈1〉 幼稚園実習について

1 実習園

(1) 実習園の規模

表中の太字は同一項目のカテゴリー間で0.2以上の差をもつ数値である。

教職員の少ない方に肯定的体験が多く、否定的体験はどちらかといえば、教職員の多い方に多い。

児童数では、多人数の方に肯定・否定の両体験とも多い。60人以下の少人数の園の実習では、「担任の姿を見て」Dや「実習生活の中で」Eに肯定的体験が多く、否定的体験は全般に少ない。

これらのことは、前回の保育所実習調査の結果と同傾向である。定員60名位の園は、家庭的雰囲気があり、子ども達とも、先生方とも交流がよくできる和やかさの中で、実習を終えたのであろうと推測される。多人数の園での実習は、多くの子ども達や先生方と十分な関わりが持てないまま実習が終了したことが推測される。しかし「子どもの様子を見て」Aを見ると、子ども達と十分な関わりを持てなかったけれど、多くの子どもの個性に出会い、それが多くの肯定的体験に繋がったのであろうと考えられる。

(2) 園長先生の属性

園長先生の性別では、女性の園長に肯定的体験が多く、男性園長に否定的体験が多い。勤務の形態では、肯定的体験は常勤に多く、否定的体験は非常勤に多い。この結果は、保育所実習調査とは全く反対の形が出た。幼稚園では男性園長の大部分は小学校長との兼務ということに関連があるように思う。

園長の年齢においては、50～60歳のベテラン園長の場合、肯定的体験が多く、否定的体験には年齢での差は余りみられない。この結果も、保育所実習調査と反対の結果であり注目したい。

表2 実習園について

質問項目	体験設問内容 カテゴリー 目	肯定否定 略号		肯定的体験項目群					否定的体験項目群						
				A	B	C	D	E	A'	B'	C ₁	C ₂	C ₃	D'	
				子どもの様子を見て	指導実習での子どもとのかかりの中で	指導実習での先生とのかかりの中で	担任の先生とのかかりの中で	実習生活の中で	園長先生や他の先生との全般的なかわりの中で	職員間の人間関係について	担任の先生とのかかりの中で（姿を見て）	担任の先生との間で	指導実習において担任の先生と（全部）	子どもとのかかりの中で	
実習園の規模	教職員数	5人～9人	206	10.5	16.1	13.2	9.3	6.2	1.3	0.7	0.5	0.4	1.9	1.9	
		10人～20人上	96	10.2	16.1	12.6	8.8	5.9	1.3	1.2	0.5	0.3	1.7	2.1	
	児童数（幼児）	60人以下	29	9.6	14.2	12.8	9.3	6.5	0.7	0.5	0.3	0.3	1.9	1.8	
		60人～150人	98	10.5	16.3	12.4	9.1	6.0	1.2	0.6	0.5	0.4	1.8	2.1	
		150人以上	169	10.5	16.2	13.4	9.2	6.1	1.4	1.0	0.5	0.3	1.9	2.0	
園長先生の属性	園長先生の性別	男 性	116	10.1	15.9	11.9	8.7	5.9	1.5	0.9	0.7	0.5	2.1	2.1	
		女 性	186	10.5	16.2	13.7	9.4	6.2	1.2	0.8	0.3	0.2	1.7	1.9	
	園長先生の勤務形態	常 勤	215	10.4	16.1	13.5	9.3	6.2	1.2	0.8	0.4	0.3	1.7	2.0	
		非常 勤	87	10.2	16.1	11.7	8.7	6.0	1.5	0.9	0.7	0.6	2.2	2.0	
	園長先生の年齢	30才～49才	76	10.1	16.2	11.4	8.8	6.1	1.3	0.5	0.5	0.4	2.3	1.9	
		50才～60才	216	10.5	16.1	13.5	9.1	6.1	1.4	1.0	0.5	0.4	1.7	2.0	
配当方法	配当方法	出身園	39	10.3	16.3	13.0	9.7	6.1	1.7	0.9	0.6	0.7	2.4	2.2	
		自分で希望	71	10.3	15.7	12.8	8.9	5.9	1.2	0.7	0.4	0.3	2.0	1.8	
		大学指定	192	10.5	16.2	13.0	9.1	6.2	1.2	0.9	0.4	0.3	1.7	2.0	
	通勤方法	自宅から	252	10.4	16.0	12.8	8.9	6.1	1.2	0.9	0.4	0.4	1.9	2.0	
		療・下宿	51	10.6	16.5	14.1	10.1	6.3	1.6	0.7	0.6	0.3	1.8	2.0	
	通勤時間（片道）	30分未満	246	10.4	16.1	13.0	9.1	6.1	1.2	0.9	0.5	0.4	1.9	2.0	
		30分以上	57	10.4	16.0	13.1	9.4	6.2	1.5	0.8	0.4	0.2	1.7	1.9	

(3) 配当方法

出身校で実習した学生は、肯定的体験もやや多いが、否定的体験も全体的に多い。

通勤の方法では、自宅からよりも、寮、下宿からの通勤に多くの肯定的体験がみられる。

これらは、前回の保育所実習調査の結果と反している。幼・保を問わず出身園は懐かしく、幼ない頃の思い出も多くある所であろうと推察し、肯定的体験も多いことを予測したが、その予測に反して、出身園に否定的体験が多いのは何故であろうか。寮や下宿から通勤する学生は、実習の疑問点や不備な点をお互いに知恵を出し合い協力学習をして、実習を乗り切ったのではないだろうか。それにひきかえ、自宅からの通勤や遠隔の出身地へ帰っての実習の場合は、協力し合える友人が無く、4週間という長い期間を、園で或は家庭でひとりで実習に取り組まなければならない、それらの心細さも否定的体験に繋がっていると考えられる。通勤時間との関係では、肯定的体験も否定的体験も余り差はない。

2 実習全般について

(1) 担当したクラス

学生達の約8割は1クラスで実習し、否定的体験は少ない。1クラスでの実習では、「指導実習で先生とのかかわり」Bと「担任の先生の姿を見て」Dに特に肯定的体験が多く、「子どもの様子を見て」Aと「指導実習での子どもとのかかわりの中で」Bでは、3クラスを実習した方に肯定的体験が多い。否定的体験は、全ての設問群で3クラス実習に多い。

児童の年齢では、3歳児に否定的体験が多い。3歳児は、4歳児や5歳児に比べると、まだまだ自分の欲求に固執したり、気の合わない友達とのいさかいも多く、その扱いに難しさを感じるのであろう。4歳児は、自制心を働かせたり実習生との相互受容も可能にするためか、肯定的体験が多く見られる。

(2) 担任の先生

ほとんどの学生は1人の先生に指導を受け、肯定的体験を多くし、否定的体験は少ない。2人以上の先生から指導を受けた学生は少数であるが、否定的体験が多い。この傾向は(1)の「担当したクラスの数」との関係によく似ている。また保育所実習調査の結果とも同じ傾向である。

長期間の実習を、担任と1:1の関係で交流密度が濃くなれば、少々の否定的体験も肯定的体験に転じるであろう。また2人以上の担任との交流は、担任が代る毎に新しい出発の人間関係をうまくこなしきれない学生の未熟さが、実習を不安定にし否定的体験に結びつくことも考えられる。

先生の年齢では、30歳以上に多くの肯定的体験がみられるが、否定的体験に年齢差はみられない。

この結果も前回の保育所実習調査と同じ傾向を示している。担任が何人代ろうとも、年齢に多少の差をみようとも、柔軟に相手を受容できる人間性が学生に育成されていれば、否定的体験は皆無になるといっても過言ではあるまい。

(3) 実習の期間と志望の変化

実習の期間を「短かすぎた・ちょうどよかった」と答えた学生は、肯定的体験を多くし、長すぎて、もてあましぎみの学生は、否定的体験を多くしている。

志望の変化では、保育者志望の気持が「より強くなった」と答えた学生は、全体に肯定的体験を多くし、「弱くなった」と答えた学生は反対に否定的体験が多く、肯定的体験が少ない。この結果は、保育者志望の強さや、実習した園のような職場志望についても同じ傾向であり、また保育所実習調査の結果とも全く一致している。これらの結果によっても分るように、保育者志望の強弱は、実習への意欲に関わり、その意欲の有無は実習体験を肯定的、あるいは否定的にし、志望への変化をもたらすということが判明したといえる。言い換えれば、実習の肯定的体験は「よい保育者」への前提なのである。

以上、幼稚園実習調査の結果を報告したが、これによると、今回の調査でも大半の学生は全体的に肯定的体験を多くしており、否定的体験は少ない。学生の肯定的体験は主として子どもの問題を中心においたものである。また実習中最も密接な関係にある担任との関わり、園長や保育者の現実の姿には、多少の否定的体験もみられる。このことは、学生の保育者志望に不安や自信喪失を招くものであろう。

多様な学生の肯定的・否定的体験は、学生・養成校・保育現場の三者それぞれの要因と、それらの相互作用にあると考えられる。

表3 実習全般について

質問 項目	体験 カテゴリー	設問 内容 該当人数	肯定的体験項目群					否定的体験項目						
			肯定・否定 略号											
			A	B	C	D	E	A'	B'	C ₁	C ₂	C ₃	D'	
			子ども の様子 を見て	指導実 習での 子ども のか わり の中 で	指導実 習での 先生と のか わり の中 で	担任の 先生を 見て	実習生 活の中 で	園長先 生や他 の先生 との全 般的な なか わり の中 で	職員間 の人間 関係に ついて	担任の 先生と のか わり の中 で (姿を 見て)	担任の 先生と の間で	指導実 習にお いて担 任の先 生と (全部)	子ども のか わり の中 で	
担当した クラス	担当した クラスの数	1 クラス	246	10.4	16.1	13.1	9.3	6.1	1.2	0.8	0.4	0.3	1.8	2.0
		2 クラス	21	10.1	15.1	11.9	8.6	5.6	0.6	0.5	0.1	0.1	1.3	1.3
		3 クラス	36	10.5	16.7	12.6	8.5	6.2	2.3	1.8	1.0	0.6	2.3	2.1
	担当した クラスの 児童の年齢	3 歳	24	9.8	16.7	12.2	8.6	5.8	1.7	1.1	0.8	0.4	2.5	2.3
		4 歳	142	10.6	16.5	13.4	9.3	6.1	1.3	0.9	0.4	0.4	1.7	1.8
		5 歳以上	135	10.2	15.6	12.7	9.0	6.3	1.2	0.7	0.4	0.3	2.0	2.1
担任の 先生	担任の 先生の数	1 人	291	10.4	16.0	13.0	9.1	6.1	1.2	0.9	0.4	0.3	1.8	2.0
		2 人以上	12	10.5	17.2	11.8	8.8	5.9	3.4	1.0	1.0	0.8	2.8	1.8
	担任の 先生の 年齢	30 歳未満	183	10.3	15.1	12.7	9.1	6.1	1.3	0.8	0.4	0.3	1.9	2.0
		30 歳以上	117	10.5	16.0	13.4	9.1	6.2	1.3	0.9	0.5	0.4	1.8	2.0
実習期間・志望の変化	実習期間	長すぎて困った	19	10.1	14.7	10.2	7.6	5.3	3.1	1.3	0.1	0.5	3.1	1.8
		困らなかった	76	9.9	15.6	12.4	9.1	6.0	1.1	0.9	0.7	0.2	1.9	2.0
		ちょうどよかった	179	10.6	16.3	13.4	9.2	6.2	1.3	0.8	0.4	0.4	1.7	2.0
		短かすぎた	29	10.2	17.1	14.0	9.9	6.0	0.4	0.5	0.3	0.4	1.7	1.6
	志望への影 響(変化)	強くなった	191	10.5	17.0	13.7	9.4	6.3	1.1	0.6	0.4	0.3	1.6	1.8
		かわらない	77	10.3	15.3	12.1	8.8	6.0	1.3	1.2	0.5	0.5	2.1	2.0
		弱くなった	34	9.6	12.9	11.4	8.4	5.6	2.4	1.6	0.5	0.4	2.6	2.7

〈2〉 保育所実習と幼稚園実習の比較

肯定的体験および否定的体験の得点化は、表1の各項目について、3段階評定し（そのような体験をして感動した－2点、そのような体験はしたが感動はしなかった－1点、そのような体験はしなかった－0点、無記入－0点とした）その平均値を算出し、保育所と幼稚園を比較する。

保育所の方の平均値が高い場合○印（その差0.2以上）または◎印（その差0.5以上）とし、幼稚園の方の平均値が高い場合×印（その差0.2以上）または✕印（その差0.5以上）とした。また差が±0.2未満の場合は＝で示す。

実習体験の分析（保育所と幼稚園）

表 4 保育所実習と幼稚園実習の比較

質問 項目 カテゴリー	設 問 内 容 人 数	肯定・否定 略 号	肯定的体験項目群					否定的体験項目群					
			A 子ども の様子 を見て	B 指導 する 際の やり か い で	C 指導 する 際の やり か い で	D 担任 の 姿 を 見 て	E 実 習 中 の 生 活 で	A' 園 生 の 先 生 と の 関 係 に 関 心 を も つ	B' 園 生 の 先 生 と の 関 係 に 関 心 を も つ	C' ₁ 担任 の 姿 を 見 て	C' ₂ 担任 の 姿 を 見 て	C' ₃ 指導 する 際の やり か い で	D' 子ども の様子 を見て

(1) 実習園について

教職員数	5人～9人	151	206	※	※	※	×	※	○	○	○	○	○	◎
	10人～20人以上	219	96	×	※	◎	=	※	◎	×	◎	○	◎	○
児童数 (幼児)	60人以下	60	29	○	=	=	○	※	◎	○	○	○	○	◎
	60人～150人	231	98	※	※	◎	×	※	○	○	◎	○	○	○
	150人以上	78	169	※	×	※	※	※	◎	×	◎	○	○	○
園長先生の 性別	男性	46	116	=	=	◎	◎	※	=	×	×	=	=	○
	女性	324	186	※	※	※	※	※	◎	○	◎	◎	◎	◎
園長先生の 勤務形態	常勤	354	215	※	※	※	×	※	◎	○	◎	◎	◎	○
	非常勤	12	87	※	=	◎	○	※	※	※	※	=	※	×
園長先生の 年齢	30才～49才	204	76	×	※	◎	○	※	○	○	◎	○	×	◎
	50才～60才	163	216	=	×	※	×	※	○	○	◎	○	◎	○
配当方法	出身園	17	39	※	※	◎	×	※	※	×	○	×	※	×
	自分で希望	115	71	×	=	○	=	※	◎	○	◎	◎	○	◎
	大学指定	238	192	※	※	=	=	※	◎	=	◎	○	◎	○
通勤方法	自宅から	257	252	◎	※	○	=	※	◎	=	◎	○	◎	○
	療・下宿	102	51	※	※	※	※	※	○	○	◎	○	=	◎
通勤時間 (片道)	30分未満	272	246	×	※	○	×	※	◎	=	◎	○	○	○
	30分以上	98	57	×	※	※	※	※	×	=	◎	○	○	◎

(2) 実習全般について

担当した クラスの数	1クラス	276	246	※	※	=	※	※	○	○	◎	○	○	○
	2クラス	62	21	=	◎	◎	◎	※	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	3クラス	32	36	※	◎	◎	◎	※	※	※	×	◎	◎	○
担当した 児童年齢	3歳	117	24	=	※	◎	○	※	=	×	○	○	=	○
	4歳以上	97	277	=	※	=	×	※	=	=	◎	×	=	◎
担任の 先生の数	1人	182	291	×	※	=	=	※	○	×	◎	○	○	◎
	2人以上	188	12	※	※	◎	=	※	※	○	○	=	×	○
担任の先生 の年齢	30歳未満	219	183	×	○	=	=	※	◎	○	◎	○	◎	◎
	30歳以上	149	117	※	※	×	×	※	○	=	○	○	○	○

実習期間	長すぎて困った	24	19	※	※	○	※	※	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	困らなかった	101	76	×	※	◎	※	※	◎	=	○	○	○	○
	ちょうどよかった	209	179	※	※	=	○	※	○	=	◎	○	○	○
	短かすぎた	56	29	=	※	※	×	※	◎	○	○	=	○	○

志望への影 響(変化)	強くなった	265	191	×	※	=	=	※	○	○	◎	○	○	◎
	かわらない	59	77	※	※	◎	○	※	○	※	○	=	×	○
	弱くなった	45	34	×	○	※	※	※	◎	※	◎	◎	◎	×

幼稚園＞保育所（※×）			26 76.5%	24 70.6%	10 29.4%	17 50.0%	34 100.0%	5 14.7%	10 29.4%	3 3.0%	2 6.0%	5 14.7%	3 3.0%
計			66.6% ($\frac{113}{170}$)					13.7% ($\frac{28}{204}$)					
幼稚園＜保育所（◎○）			2 6.0%	4 11.8%	16 47.1%	9 26.5%	0 0%	26 76.5%	16 47.1%	31 91.1%	27 79.4%	25 73.5%	31 91.1%
計			18.2% ($\frac{31}{170}$)					76.4% ($\frac{156}{204}$)					

1 全体の傾向

(1) 肯定的体験は、幼稚園優位の項目が66.6% (113/170) を占めるに対して、保育所優位の項目は、18.2% (31/170) にすぎない。幼稚園の方が肯定的体験が多いことが分る。

(2) 否定的体験は、肯定的体験とは反対に、幼稚園優位の項目は13.7% (18/204) と少なく、保育所優位の項目が76.4% (116/204) と非常に多い。保育所実習は幼稚園実習に比べて否定的体験が多いといえる。

2 項目間比較

(1) 肯定的体験5設問のほとんど全てが幼稚園優位で、しかも否定的体験6設問のほとんど全てが保育所優位の項目がいくつかある。「実習園について」では教職員数5人～9人・児童数150人以上・園長の常勤・寮下宿からの通勤の項目である。「実習全般について」では、担当したクラスの数1クラス、担任の先生の年齢30歳以上の項目であった。

(2) 肯定的体験のほとんどの設問で保育所優位の項目は、担当したクラスが2クラスの場合のみであった。

(3) 否定的体験のほとんどの設問で幼稚園優位の項目は、園長が非常勤・配当方法が出身園の2つの項目のみであった。

3 設問間の比較

(1) 肯定的体験では、34項目中幼稚園優位はE (実習生活の中で) 100 (34/34), A (子どもの様子を見て) 76.5% (26/34), B (指導実習での子どもとのかかわり) 70.6% (24/34) で、C (指導実習で先生との関りに中で) では、29.4% (10/34) にしかすぎず、D (担任の先生の姿を見て) では50.0% (17/34) と幼保で拮抗している。

(2) 否定的体験では、34項目中保育所優位の割合が多いものから並べると、C' (担任の先生との関りの中で) 91.1% (31/34), D' (子どもとの関りの中で) 91.1% (31/34), C' (担任の先生との間で) 79.4% (27/34), A' (園長先生や他の先生との全般的なかかわりの中で) 76.5% (26/34) と続く。しかし B' (職員間の人間関係) のみは47.1% (16/34) にしかすぎない。

IV 考察とまとめ

保育所・幼稚園は社会的ニーズの異なる性格をもつ施設とはいえ、一般的には、共通点の多い至近距離をもつ施設なので、学生は同じような実習体験をしてくるのではないかと予測した。

まず、共通点としてあげられるものは、対象の幼児・保育のねらい (幼児教育の目的) ・実習する学生・保育者 (同年配の女性) である。しかし勤務の条件 (保育時間やゆとりの時間) ・研修時間 (研究時間や長期の休日) ・社会通念 (学校教育との関連や、社会的レベル視の問題) など異なる点も多い。

調査の結果は、保育所と幼稚園の実習体験には、肯定的体験が多く、否定的体験が少ないことなどの類似点が多いことが判明した。しかし、同時に、両施設とも施設特有の実習条件があり、指導の形態があり、実習生は独自の実習体験をしていることが分り、両実習体験には多くの相違点もあることが判明

した。そして、実習中の肯定的・否定的体験は、実習以前の、学生・養成校・保育現場の人間的人格なもの、組織構成の仕組み、指導の方法や形態などから派生してくる条件の影響が大きいことも明らかになった。本論では、保育所の実習体験と幼稚園の実習体験の主な相違点について考察をする。

なぜ、保育所実習に肯定的体験が少なく、否定的体験が多いのであろうか。

保育所実習は幼稚園実習に比べ、期間が短かく、対象児は可愛い乳児をはじめ年少児が多い。保育時間も幼稚園の2倍と長く、昼間の大半を寝食を共にするような家庭的雰囲気の中の実習である。「子どもが大好きだから」と自負している学生の、保育所実習は幼稚園実習よりも当然肯定的体験が多いものと思ったが、表4の結果は意外である。

これらの、保育所・幼稚園の実習体験の差の要因として、次のようなことが考えられる。

1 学生の保育者としての育ちの段階の差

ほとんどの学生は、幼稚園実習に先立って、施設と保育所の実習を経験する。二つの実習を終えたそれぞれの段階で、実習体験の反省や、疑問点、課題に取り組み、次回の実習に備えようと努める。このことは、幼児理解や保育技術の向上に繋がり幼稚園実習を成功へ導くことも考えられる。当然保育観、人間観などの人格的向上も見逃せない。

一方否定的体験は、心ある学生は、肯定的体験に転化させ、またある学生は、「実習とはこんなもの」とパターン化して、否定疑問の解決よりもむしろ諦めに似た、いわゆる「慣れ」で、感情を動かすことをしないのではないかと案じられる。これらの事情が幼稚園実習に否定的体験を少なくしているのではないかと考えられる。

2 実習現場の問題

(1) 園長の資格

保育所長の資格は、明らかに幼稚園長のそれとは異なる。幼・保はニーズの異なる施設であるから、園長資格が同一である必要はないが、子どもを主体とする幼保一元化などを考えてみると、何等かの調整が必要ではないだろうか。小学校長との兼務、市町村役場職員との兼務などは、職員の志気をにぶらせるばかりでなく、人間関係の和にとっても、保育内容や保育運営の充実にとってもマイナス点が多いと考えられる。園長は常に職員や子ども達の手の届く処にいて、保護者や地域への対応はもとより、園全体の情緒安定の要にならなければならない。

このためには、基礎資格としての保母資格や、幼稚園教諭の資格取得を位置づけてもよいのではないだろうか。園長の在、不在、資格の有無（人格的資格や指導力）などが、学生の実習体験に結びつくとも考えられる。

(4) 保育条件と保育内容

児童の年齢の巾の広さ・複数担任制・保育時間・給食や午睡の指導の困難さ・多忙さとゆとりのなさ（実習生の指導の時間のなさ）など、保育所の場合、乳児を含む広い年齢差に扱いの難しさを感じ戸惑っているであろう。保育時間の長さは、子どもと楽しく遊び保育を理解する時としてよりも、気疲れや体力の消耗になるのではなかろうか。給食や午睡などの生活指導は、学生が一朝一夕にうまくなし

得る領域ではなく、失敗の連続であつただろうと思われる。

これらの精神的、肉体的疲労はより消極的態度となり、実習を不成功に終らせる否定的体験に繋がることも多いと考えられる。

（3）職員の問題（職種の複雑さ・研修時間のなさ）

園長・主任保育・保育・調理員・その他の雇用員など、保育所には職種の複雑さがある。これらの事情は、所内の和や協力のもち方に困難を伴い易く人間関係の在り方にも影響が多い。

また、保育所には、幼稚園のように長期の休暇もなく、日常の生活においても勤務中は常に子どもと共に生活であり、自己研修の時間が持ち難い。従って実習生の受け入れや指導は「困難」を伴うばかりでなく「迷惑」でさえある。これらの事情が学生に理解されにくいきらいがありはしないか。

3 養成校の姿勢

実習の事前教育の不備は十分問わねばならない。幼・保のニードの差、保育条件と保育内容の共通点や相違点などの理解のさせ方、学生が自主的に幼児理解に取り組める教授の内容や方法、豊かで複雑な社会現象や人間関係のあり方などを、理解させる努力が不十分であることも大きい要因であろう。

以上、学生・養成校・保育現場それぞれ三者三様のあり方のひずみの中で、僅かではあるが否定的体験を学生はしている。「実習」は、学生が保育現場へ初めて足を踏み入れる時である。でき得れば、総ての学生が肯定的体験を多くし「実習」を成功させて欲しいものである。

浅野ら（1983）は、「実習は実地保育研究である。実習を円滑にするためには、実習先の価値観の方法的受容である」と述べ、その価値観は、具体的には「第1は、保育方針・目標といった実習先全体の経営・運営に関するレベル。第2は、保育内容・方法に見られる保育活動に関するレベル。第3は、保育者の服装・ことばづかいといったいわゆる個人的趣味に関するレベル」だといっている。

この言葉はそのままうらがえて、保育現場が、学生・養成校のもつ価値観を受容することでもあるといえるのではなからうか。つまり、実習のもつ本質的意義とは、

「学生・養成校・保育現場の三者がそれぞれにとっての『実習』の位置づけ・機能や役割を相互に、正しく受容し合い、補完し合い、高め合うこと」であるべきではないだろうか。

学生は「実習」を通して自分を知ること。すなわち、自分自身が保育者として生きていけるかどうかを試す時である。学内で修得した知識や技能の理論と実践を体験学習し、学びながら将来幼児教育をしていくのに人間的、能力的に相応しいかどうか、自己点検をしている時であろう。失敗し消極的になったり、うまくいったと自信をもったり、肯定・否定、悲喜こもごもの体験を繰り返しながら、自分と向かい合っている時である筈である。

養成校にとっての「実習」は、「好ましい保育養成のための学外授業」である。学生を「実習」の場に送る迄に、保育理論や、保育技術の教授と共に、「実習」の意義や目的を十分理解させ、実習生として謙虚に指導が受けられ、保育現場の子ども達にとっても有為の存在にあり、学生が精神的にも肉体的にも保育者を志望している学生としての育ちを保障することである。加えて、実習先との細やかな連携と、事後処理も見逃すことはできない。

保育現場では「実習」は第一義的なものではない。本分の「保育」に支障を来すことを承知の引き受けであり、迷惑である。しかし、後継者養成という広い視野に立って学生を柔軟に受け入れ、日常生活の中で子どもとの関りや、保育者の仕事内容、環境に適応した人間関係のあり方などの臨床的指導を惜しみなくすることだと思われる。

これらは、三者三様、不変の本質論だと思う。しかし、学生の本音の体験反省からは三者の機能が惜しみなく発揮されているとは思われない。

最近の社会事情は、学生や養成校・保育現場の在り方をもかえた。学生は対人関係においては、支持され、承認されることの価値を重視するようになった（平松，1985）といわれ、自主自律の取り組みができ難い。これらの学生の甘えと幼なさの現れは「実習」の場での否定的体験に繋がることは必然であろう。

保育現場には、年中切れ目のない程の多くの学生の実習で、「実習慣れ」が子ども達にも職員の方にもできてはいないだろうか。実習への期待や不安をもちながら懸命に取り組もうとする個々の学生や、養成校の価値観の受容が乏しいのではないだろうかと案じられる。

養成校においても、多数の学生を実習園を持たない負い目を感じながらの依頼や諸準備、学生の指導、実習の位置づけなども不十分なまま「実習」の場への送り出しになってはいないだろうか。

今、社会はわれわれに、将来を負う幼児の教育者として、望ましい保育者養成を、量よりも質をと強く要求している。「実習」が単なる資格取得のためであったり、慣れや事務的处理で終るのではなく、学生も養成校も保育現場も、本音に耳を傾けつつ、実習の本質論へのアプローチを続けていかねばならない。そのためにも、学生の実習体験によって把握された、学生の本音の提言をめぐり、養成校も保育現場も謙虚な反省や工夫がなされ、三者が「よい保育者養成」を軸に、実習のあるべき姿について、相互理解・相互受容が深まることをわれわれは願っている。

付 記

本論文は、1984年度の日本保育学会および全国保母養成協議会研究大会に下記の題目で発表した内容をまとめ直したものである。

青木里喜子・森安万亀子・北川歳昭 1984 実習体験の分析（4）感動体験とショック体験（幼稚園実習その2）、日本保育学会第37回大会研究論文集，672-673.

青木里喜子・森安万亀子・北川歳昭 1984 実習体験の分析（6）保育所実習と幼稚園実習の比較その2，全国保母養成協議会第23回研究大会論文集，154-155.

引 用 文 献

青木里喜子・森安万亀子・北川歳昭 1984 実習体験の分析（2）肯定的体験と否定的体験（保育所実習その二），中

国短期大学紀要，15，51-60.

浅野俊道・徳本達夫・川口明憲 1983 実習理論の再検討（1）（2），日本保育学会第36回大会研究論文集，588-591.

浅野俊道・徳本達夫・川口明憲 1983 幼稚園教育実習の探究，創言社.

平松芳樹 1985 保育学生の対人関係価値における変化，全国保母養成協議会第24回研究大会論文集，62-63.

森安万亀子・青木里喜子・北川歳昭 1983 実習体験の分析（1）肯定的体験と否定的体験（保育所実習その一），就実論叢，13，311-340.

森安万亀子・青木里喜子・北川歳昭 1984 実習体験の分析（3）肯定的体験と否定的体験（保育所実習と幼稚園実習の比較その一），就実論叢，14，117-137.

澤 文治・民秋 言 1982 保育所実習の方法と課題，学苑社，12-17.

徳本達夫 1981 短大における保育者養成教育の諸問題と課題，山口芸術短期大学紀要，11，137-158.